81　「陸奥の吹雪」の曲が「ヨナ抜キ」とはどういうことか

問　軍歌「陸奥の吹雪」の曲が、「ヨナ抜キ」のすぐれた作曲だといわれますが、「ヨナ抜キ」とはどういうことですか。

答　「定本日本の軍歌」（堀内敬三）に、「陸奥の吹雪」の曲について、次のように記しています。『この歌が作られたのはこの惨事が報ぜられてからすぐであるらしい。歌曲は明治三十五年二月二十二日東京牛込の文宝堂から出版された。作曲者は「好楽居士」という仮名の人だが曲の形式がキチンと三部分形式になっている点や、音階が「ヨナ抜キ」型長音階と俗楽陽音階とを巧みに折衷してある点が注目に値し、曲節もよくできているので誰か相当名ある人であったろうと思われる』。「ヨナ抜キ」について、同書の別の個所で、次のように述べています。『この軍歌〔敵は幾万〕について、もう一つ注意されるところは音階である。これは長音階であるけれども第四音と第七音とを原則として省いている。これを明治時代の音楽家は「ヨナ抜キぶし」と呼んでいた。（私達は長音階を「ヒフミヨイムナヒ」〔1.2.3.4.5.6.7.1.〕と習ったが、その「ヨ」〔4〕と「ナ」〔7〕とを抜いた節という意味である）ヨナ抜キ音階は「ドレミソラド」という五声音階で、日本の雅楽の律旋（りっせん）や俗楽の陽旋（ようせん）と近似した形であるために日本人の心情に訴えるところが多く、古くは明治時代の唱歌から近くは大正昭和の流行歌までその名作の大多数は「ヨナ抜キ」であり特に軍歌においては「ヨナ抜キ」ならざるものは稀（まれ）なのである。その「ヨナ抜キ」音階はこれ以前から日本の唱歌にあった。それは上真行（うえさねみち）・芝葛鎮（しばふじつね）・奥好義（おくよしいさ）などという宮内省の雅楽者たちによって作曲された唱歌、たとえば奥作曲の「舟あそび（『風と波とに送られて』明治二十一年）や「霞む夕日」（二十二年）・芝作曲の「三千余万」（二十二年）などがその例であって、この人々は明治初年に出て邦楽と洋楽とを「ヨナ抜キ」音階によって結びつけたのであるが、その音階を放胆濶達（ほうたんかったつ）に使いこなして、軍歌・唱歌に日本的な味を強く与えた人は、この「敵は幾万」の作曲者小山作之助であった』。また『……音階は「ヨナ抜キ」であるが第四音を巧みに取り入れて特殊な味をつくり、劈頭（へきとう）に切分を出して律動型を耳新しいものにした。しかし言文一致体七五調〔雪の進軍〕の歌詞は古来の日本民謡に系統をひくものであり、「ヨナ抜キ音階」はたとえ多少の変化をつけても日本的な感じがする。―それだからこの曲は三味線に乗りやすい。― 切分音（ジンコーペ）の律動型も日本人にとって親しみの深いものである』。『〔四条畷〕詠史歌のすぐれたものの一つである。この歌の特色は「ヨナ抜キ」の短調の曲であって短調の軍歌はこれまでのところまことに少ないのであるが、この歌は「ヨナ抜キ」の短調を用いることによって能く日本人の好みと合致した悲壮感をとらえており、そうしてこの旋律は実際にすぐれた作なのである』。「ヨナ抜キ」につ

いて「軍歌と日本人」（加太こうじ）にも次のように記されています。『西洋音階を日本の教育にとり入れることを文部省が方針にしたのは明治五年だがその頃はそうきめただけで実際にはおこなわれなかった。明治七年には文部省刊行「小学読本巻一」にピアノやラッパに関する知識を教える項目がある。だが実際にはピアノを見たという小学教師はほとんどいなかった。明治八年に文部省に出仕していた伊沢修二[(1)]がアメリカへ留学を命ぜられた。伊沢は理学をまなぶことが目的だったが、はじめにブリッジオーター師範学校で音楽をまなんだ。明治十一年に日本に帰った伊沢は東京師範学校長を命ぜられ、教育学者として知られた。明治十二年に伊沢は新しく作られた音楽取調掛（とりしらべがかり）に任ぜられ、ここに、はじめて西洋音階を本格的な教育面へ導入する道がひらけた。平安時代の唱歌（しょうか）という言葉からとった小学校での音楽教育を意味する唱歌（しょうか）は、伊沢の帰朝によって、実践上の経験者を得たわけである。一方宮内省の雅楽家（ががくか）たちが西洋式の吹奏楽を習った。明治十二年にはピアノを習い、十三年には管弦楽を習った。明治十四年には音楽取調掛伝習生による日本ではじめての管弦楽演奏会がひらかれた。こういう唱歌教育と、雅楽家による西洋音楽の輸入が、日清戦争の頃には、歌を楽譜で普及する下地を作っていた。日本の音楽には定まった音をだす標準楽器がなく、それにともなう音譜もない。かりに音譜を作ったとしても心覚え程度である。耳で覚えて習い、カンにたよって演奏するのが日本音楽のならわしだった。日本の歌の普及は耳とカンにたよっていたのだが、西洋音譜による楽譜の発行と普及、それを受けて演奏する者の養成は、古い日本の原始的な音楽に対する、新しい日本の合理的な音楽の出発だった。その成果が、日清戦争の頃から、ぽつぽつとあらわれて楽譜による歌の普及、ならびに創作ということになる。その軍歌の面へのあらわれが、「婦人従軍歌」「勇敢なる水兵」「ラッパの響（ひびき）」「豊島（ほうとう）の戦」さらには先に書いた「元寇」「敵は幾万」などである。「敵は幾万」はヨナヌキ節（ぶし）のはじまりだといわれている。ヨナヌキ節とは、ドレミハソラシドを伊沢修二が、当時の日本人にわかりやすいように＜ヒフミヨイムナ＞と直して教えたが、そのうち＜ヨ＞と＜ナ＞すなわち＜ハ＞と＜シ＞がぬけているという意味である。第四音と第七音をはぶいた五つの音を使って組み立てられた歌は、日本の雅楽や俗曲、民謡などの旋律に似ていた。それゆえ、日本人にはうたいやすい。ヨナヌキ節は西洋にもある。スコットランド民謡などに多いのだが、日本人がうたうのに向いていたので歌詞を日本で作ってそのメロデーにあてはめて唱歌にした。「蛍の光」「故郷の空」などがそれである。以後、ヨナヌキの音階は日本の作曲家によってさかんに使われた。日本の歌はヨナヌキ節だとまでいわれるようになった。昭和になって流行した歌謡曲のなかにもヨナヌキ節は多い』。「東京のうた」（朝日新聞社編）にも次のように記されています。『晋平節の人気のナゾを理論的に研究した音楽評論家園部三郎によると、中山晋平の曲のうち、いちばん生命がながいのは「船頭小唄」〔野口雨情作詞〕だという。…処女作「カチューシャ[(2)]の唄」で作曲家としてのスタートをきった中山は、この曲以後〔「船頭小唄」作曲の大正１０年〕それまでの曲につきまとっていたバタ臭さを捨て、日本調一本に傾いていく。カチューシャの松井

須磨子が半音を正確にうたえず苦労する姿をみた中山は、数年の苦心のすえ日本人にうたいやすい独得の音階をつくりだした。園部がこの音階を分析、そのなかに三味線や琴で江戸時代から日本人の体質にしみついた俗曲の音階がかくされていることを指摘して、音楽界に話題をまいたのは、中山死後十年たったさる三十七年のこと。中山の鋭い音感は無意識のうちに日本人の"音"をききわけていたのかも知れない。枯れすすきは、その中山式音階でつくられた最初の曲。昭和以後の流行歌の源流となり、やがて、より都会的な哀感をこめた古賀メロデーを生みだすことにもなる。NHK芸能局長の長男中山卯郎は「だれでもうたえるうたをつくることが父の終生の理想でした」という。……洋楽の通常の音階からファとシを除いた五音からなる短調の音階。ヨナ抜キ音階とよばれる。半音がないためうたいやすいのと短調の哀感が日本人の好みに合うのが特色で、現在の流行歌の多くもこのパターンを基調にしているといわれる。この音階のなかに俗曲のみやこ節の音階が潜在しているというのが園部三郎の指摘。文部省が明治初年以来、唱歌を通じて植えつけようとした音階、いわゆる唱歌調はファとシを除いた長調（ヨナ抜キ長音階）である』。

注(1)　嘉永4年〔1851〕6月29日〔新暦7月27日〕信濃国伊那郡高遠に生まれ、慶応3年17才の時江戸に出て洋学を修め、次いで藩主に従い京都に赴いて蘭学を学び、明治2年東京に出、5年22才で南校〔なんこう。明治2年開成学校（開成所。洋学教育の蕃書調所の後身）を大学南校と改称、同4年大学廃止により単に南校、後に開成学校・東京開成学校を経て明治10年東京大学、同19年帝国大学となった。現東京大学の前身。これに対する大学東校は東大医学部の前身。〕を卒業、文部省出仕、7年愛知師範学校長、8年米国出張、11年帰朝して東京師範学校長、12年文部省音楽取調掛御用掛を兼務。14年音楽取調掛長。19年文部省編修局長、21年東京音楽学校長兼任、23年編修局廃止につき東京音楽学校長兼東京盲唖学校長、24年辞任、28年から30年まで台湾総督府学務部長、32年東京高等師範学校長、勅選貴族院議員、晩年は吃音矯正事業に尽し、大正6年〔1917〕5月3日67才で歿した。彼は、新らしい時代の教育行政家であり学者でもあったが、特に音楽の造詣深く、わが国の音楽教育制度はこの人によって築かれたものであり、また唱歌の作曲〔「来たれや来れ」・「紀元節」・「すめら御国」など〕を試みた最初の人でもあった。

注(2)　作曲家。長野県中野市出身。大正3年処女作「カチューシャの歌」で有名となり、「船頭小唄」「東京行進曲」「波浮の港」などの流行歌、「証城寺の狸ばやし」などの童謡作曲で大衆に親しまれた。昭和27年66才で死去。昭和42年1月18日、土井晩翠を生んだわが仙台市は、彼の出身地中野市と、「荒城の月」の作曲者滝廉太郎の縁故の地大分県竹田市〔たけたし〕と、音楽のゆかりを基盤として3市間音楽姉妹都市となった。

資料　定本日本の軍歌（堀内敬三）
軍歌と日本人（加太こうじ）
東京のうた（朝日新聞社編）